# 山を追われて

高野敦志

山を追われて
あとがき

目次

山を追われて
あとがき

山を追われて

三十過すぎの権太ごんたは、老いた母と畑で人参にんじんの種をまいていた。澄すんだ青空のもと、日の光を浴びて働くのが好きだった。遠くに見える山には、雪がまだ残っており、ウサギが寝ねているように見える。死んだ祖父そふはマタギと呼よばれる猟師りょうしだった。春になると、冬眠とうみんしていた熊を撃うつ穴あな捕どりをしていた。汗あせをぬぐって山を見上げるたびに、祖父が見守ってくれている気がした。

二十歳はたちの頃ころ、浜通はまどおりで大きな事故じこがあり、目に見えない毒どくが空から降ふってきた。村人の多くが畑を捨すてて、遠くの町に避難ひなんしていった。隣となりの家の畑も放置され、雑草ざっそうが生おい茂しげるままになった。それでも、権太は母とこの村にとどまることを選んだ。

そんな暮くらしにも、変化が訪おとずれようとしていた。昨年の末、自然を守るために、日の光で電気を作るという話を、役場の人が話しているのを聞いた。いい話だと思ったが、祖父が猟りょうをしていた山の木は切られ、はげ山になってしまった。電気を作るための黒い板が、山肌やまはだいっぱいに敷しかれていった。熊が里に下りてくるようになったのは、それからだった。

収穫しゅうかくを前にした人参は、多くが掘ほり起おこされ、大小の足跡あしあとと、すりつぶしたような糞ふんが畑に残っていた。このままでは、今の生活を続けていけない。権太は祖父が残した猟銃りょうじゅうとリュックサックを背負せおい、ナガサと呼ばれる短刀を腰こしに差して、無残に削けずられた山を登っていった。雨が降った後だったので、土がむき出しになった所には、水が流れた溝みぞができていた。沢さわに沿そって進んでいったとき、ざわざわという木が揺ゆすられる音がした。

ブナの林の間から、黒くて大きな体がのぞいていた。こちらの足音を聞きつけたのか、茂しげみの中から一頭の熊が姿を現あらわした。後ろ足で立ち上がると、胸のあたりに白い三日月の毛が見え

た。歯をむき出してウーウーうなると、こちらに向かって迫せまってくる。権太は逃にげ出だしたくなるのをこらえて、熊に向かって銃じゅうを撃った。肩かたのあたりを傷きずつけたのだが、それでも熊は走ってくる。二発、三発撃つと、熊は茂みの中にどうと倒たおれた。
　一人で熊を解体かいたいすることはできない。役場に連絡れんらくして、始末を頼たのむしかないだろう。とりあえず、引き返そうと思ったところ、林の奥おくから「おいおい」という声がした。誰だれか倒たおれているのだろうか。茂みを踏ふみ分わけていくと、犬のような大きさの子熊が鳴いているではないか。母親が殺ころされたのも、まだ分かっていないのだろう。このまま放置しても、生き長らえることはできない。リュックサックからロープを取り出すと、子熊を縛しばり上あげて家に連れ帰ることにした。
「熊の子なんか連れでぎで、なじょすんだ。すぐに大ぎぐなっぺ」
「親を殺ころしちまったがら、放っておげば死んちまうべ」
「そだこど言って、誰が世話すんだ」
　母は子熊を飼かうことに、すぐにはうんと言わなかった。それでも、哺乳瓶ほにゅうびんと粉こなミルクを買ってきてくれた。農家に嫁よめはなかなか来ないから、黒い毛が生えた孫ができたようなものだった。抱だき上あげると、母は目を細めながらあやしている。
「めんこいなあ。まるまる太った犬の子みだいだ」
「んだなあ」
　権太はメスの子熊に「あかり」という名前をつけた。家の中が少しでも明るくなってほしいという願いからだった。あかりは黒くまん丸い目に丸っこい耳、とがった口をしていた。母の腕うでから下りると、畳たたみの上を走るのだが、すぐに転んでしまい、でんぐり返しをしている。生きている縫ぬいぐるみのようだった。ただ、足の裏うらは毛が生えておらず、形は人間と同じだった。哺乳瓶を与あたえると、前足で上手にはさんで、乳首ちくびからごくごく飲みはじめた。人間の赤あかん坊ぼうもこんな飲み方をするのかと、権太は思った。

　しばらくして、リンゴや白菜をやってみた。与あたえれば与えるだけ食べて、どんどん成長していった。時には、鮭さけの切り身をやったが、一切れでは満足できないのか、権太や母が食べている物までほしがる。座敷ざしきの中に閉とじこめて、畑仕事に出かけたのだが、帰ってみると、仏間ぶつまの障子しょうじは破やぶられ、台所の戸棚とだなは開けられていた。ゴミ箱もひっくり返されて、魚の骨ほねや野菜くずがまき散らされていた。
「いい加減かげんにしらんしょ、この熊は」
　母が怒おこると、あかりは歯をむき出して、カチカチと鳴らした。驚おどろいて権太がうちに入ってくると、あかりは後ろ足で立って、ウェーと鳴くと、うれしそうに舌したを出した。そこで、普段ふだんは首輪をつけて柱につないでおき、家にいる間だけ、座敷で遊ばせるようにしたが、柱や壁かべにはいくつもの爪つめ痕あとが残った。
「この熊、なじょすんだ。うぢにはただ飯食わしておぐ余裕よゆうはねえんだぞ」
「げんとも、おっかさま、あらほどめんこがってくれだのに」
「熊がめんこいのは子供こどものうぢだ。大ぎぐなったら、熊の胆い取るが、毛皮はがすしかねえべ。じさまならそだはずだ」
　胸むねが張はり裂さける思いで、権太は首輪をつけたあかりを庭に連れていった。遊んでくれるものと思って、あかりはぐいぐいロープを引ひっ張ぱった。柿かきの木につなぐと、座敷の奥から猟銃を取り出した。熊は何かおかしいと気づいたらしい。おびえたように震ふるえ、丸い目でこちらをじっと見つめている。
「おらにはでぎねえ」
　次の日の午後、軽トラックと檻おりを借りてきて、あかりを生まれた山に返すことにした。中に好物の鮭を入れると、あかりはおとなしく入っていった。母に手伝ってもらい、荷台の上に載のせると、あかりは連れていかれると知って、グォーと遠吠とおぼえをした。
　前の年の台風で、山はすっかり荒あれていた。電気を作る板は、そこかしこに散らばり、赤土が流れ出て、斜面しゃめんが崩くずれ

ているところもあった。権太は山の裏側うらがわの、まだ林が残っているあたりに着くと、荷台の檻を開けた。あかりは下におりて、地面のにおいをかいだ。そのまま林に入っていくと思ったが、振ふり返かえると、小走りでやってきて権太に抱だきついた。爪がシャツを破って食くい込こんできた。とっさに権太は、腰につけていたナガサという短刀で、あかりの胸を刺さした。これは悪い夢ゆめではないか。が、夢ではなかった。しかも女の声で、息も絶たえ絶だえに話しだした。
「はげ山になった山には、もう食べる物がありません。また里に下りていったら、他の猟師に撃たれたでしょう。あなたの手にかかって死ぬのは本望ほんもうです。ずっと暮らしていたかった。そしたら、いつかは人間になれると思ったのに……」

## あとがき

蝦夷えぞとアイヌの違いは何か。東北各地にはアイヌ語に由来する地名が多く残っている。江戸時代中期まで、津軽にはアイヌの集落が存在していた。アイヌの彫ぼりの深い顔は、樺から太ふとや大陸の民族との通婚によるものだろうか。とはいえ、縄じよう文もん人じんの遺伝子を最も多く受け継いでいるのは、アイヌだと言われる。現在のアイヌは和人との混血が進んでいるためか、かつてのように彫りの深い人に出会うことは少なくなった。

東北地方にはマタギと呼ばれる狩猟民がいるが、習俗や言葉にはアイヌ文化に由来するものが多い。マタギが行う熊の狩猟にも、アイヌと共通するところが少なくない。アイヌは熊を撃ち取ると、子熊を集落に連れて帰る。母熊がいなければ子熊は死んでしまうからである。幼いうちは子供の遊び相手になるが、大きくなると檻おりに入れ、イヨマンテ（熊送り）で成長した熊を生いけ贄にえにするのである。この物語はそれをマタギの環境に置き換えてみたのである。

東日本大震災による福島第一原発の爆発で、福島は甚大な被害を受けて広範囲が放射能に汚染された。その後、再生エネルギーの利用が叫ばれるようになり、日本各地の山が削られて、メガソーラーが敷設されるようになった。熊が人里に下りてくるようになったのは、太陽光発電のために山が削られ、すみかを奪われたことが関係すると見られる。こうした状況が物語が生まれた背景である。

二〇二五年三月七日

高野敦志